

涙の風景、涙の共同体： 『骨董屋』におけるノスタルジー

榎 本 洋

1・序：涙の風景

ハックスレー (Aldous Huxley) が『文学における卑俗なもの』 (*Vulgarity in Literature*, 1930) でいみじくも指摘したように、『骨董屋』 (*The Old Curiosity Shop*) の読後感は “The really monstrous emotional vulgarity, of which he is guilty now and then in all his books” (Huxley, 250) の一言に集約できるかもしれない。確かに『骨董屋』のプロットは単純で、悪辣なクイルプ (Quilp) によって祖父トレント老人 (Old Trent) と共にロンドンを追われ、あてど無く彷徨ううちに最期を迎える薄幸の少女ネル (Nell) の物語が中心になっている。勿論、その道中には様々な人物に出会う。パンチ・アンド・ジュディーのコードリン (Codlin) とショーター (Shorter) らの旅芸人の一群を始めとして、マートン氏 (Mr. Marton) こと校長先生、ろう人形館のジャーリー夫人 (Mrs. Jarley) との出会い、そして再びマートン氏と再会し、最期を迎えるといういわばテキストの円環構造が行き場のない閉塞感をもたらし、ネルの死をあらかじめ決められたものとの印象を強めている^{註1}。それに執拗に言及される涙の場面が加わる。例えば、骨董屋の立ち退きが決まった時、昔の思い出が甦り、胸が一杯になる (101) といった具合に、ネルは言うに及ばず、多くの人物が涙にくれる。更に、子供の死 (197) やトレント老人の欲深さ故にネルが遭遇する数々の困難を描いた箇所は、当時の読者の同情を誘ったと思われる。しかし、一方ではあからさまな感情の露出にたじろぎ、辟易する後世の読者も少なからずいた事は、ハックスレーを持ち出すまでもないだろう。いずれにせよハックスレーの反発は、ネルと周辺人物の (彼にとって) 異質な感情形式に由来していると思われる。

しかしながら、テキストの感傷的な要因を支え、ネルと同じくらい大きな比率を占めるのに田園・農村の描写も見逃すことはできない。「巡礼」（122）と渾名されるネル、トレント老人はひとまずロンドンを離れる。遠方にセント・ポールの尖塔を望む郊外の田園はおよそ次のような具合である。

The freshness of the day, the singing of the birds, the beauty of the waving grass, the deep green leaves, the wild flowers, and the thousand exquisite scents and sounds that floated in the air, — deep joys to most of us, but most of all to those whose life is in a crowd or who live solitarily in great cities as in the bucket of a human well, — sunk into their breasts and made them very glad. (122)

描写そのものはのどかなものであり、一見したところネル等の運命とはいささかも関係がないように思われる。しかし、ネルが“a return of the simple pleasures they had once enjoyed, a relief from the gloomy solitude in which she had lived, an escape from the heartless people”（101）と逃亡への明るい夢を牧歌的な風景のなかに託して語るとき、それは彼らの心情を少なからず代弁したものとなる。彼らの逃亡生活には“the restoration of his peace of mind”

（76）という期待があったからに他ならない。そして、“the bucket of a human well”（122）のような都会の喧騒を離れて進行する彼らの逃避行が、一方では反生命的な色合に染め上げられていくことは、墓地や教会で佇むネルの姿から容易に想像できる。墓碑銘を読み、墓地の散策に“a curious kind of pleasure”（133）を感じ、また教会の静かな一隅に腰掛け“gazing round with a feeling of awe, tempered with a calm delight, felt that now she was happy, and at rest”

（401）と安らぎを感じるネル。マーカス（Steven Marcus）はテキストの牧歌的な光景が絶えず死の影に縁取られていると述べ、“the idyllic recollection of Eden, of life restored to its pristine harmony, has here developed clearly on the side of its tendency toward death”（Marcus, 142）と、43章でゴシック教会の中で佇むネルの有様を基に指摘している。つまり、『骨董屋』の牧歌的な光景

も死と深く関わっている限り、涙とは必ずしも無縁とは言えないのだ。

一見したところ美化された田園と涙は絶妙の組合せのように見える。しかしながら、テキストの風景は、それが都会的なものに対してもはや対抗軸をなさないことを教えてくれる。確かに冒頭の3章まで、つまりハンフリー親方 (Master Humphrey) が “I shall for the convenience of the narrative detach myself from its further course” (33) と表舞台から退却し、三人称の語りへと転換するまでの都市は “greater opportunity of speculating on the characters and occupations of those who fill the streets” (7) と好奇と観察の対象であった。クイルプ、ディック (Dick Swiveller), キット (Kit), ブラス兄妹 (Mr. & Miss Sally Brass) 等が生活する街はそれなりに活気にあふれたものである (58-9)。しかし、都市が読者に与える印象は次第に拡散し、まとまりのないものになっていく。特にネルとトレント老人にとって町中の騒然とした有様は、戸惑いと嫌悪の対象でもある。病気から回復したトレント老人にとって “The noise and motion in the streets fatigued his brain at first” (97) であったし、競馬が開かれる街の騒然とした様子もネル達には “this delicious scene” (153) とはいかず、寧ろ恐怖すら覚える有様だった。とりわけ印象的なのは、ネルと老人が通過する貧民街の様子である。

This was a wide, wide track — for the humble followers of the camp of wealth pitch their tents round about it for many a mile — but its character was still the same. Damp rotten houses, many to let, many yet building, many half built and mouldering away — lodgings, where it would be hard to tell which needed pity most, those who let or those who came to take — children, scantily fed and clothed, spread over every street, and sprawling in the dust — scolding mothers, stamping their slipshod feet with noisy threats upon the pavement (121)

ルーカス (John Lucas) はこの箇所を指して “much more than a Boz-like sketch” (Lucas, 79) と表現している。逃避の動機が、既に指摘したように、都会人の

“their lonely way of life, their retired habits, and strict seclusion” (287-8) から逃れるのが目的ならば否定的な印象しか得られないのは当然かもしれない。

大切なのは、のどかな光景の合間に悲惨なそれが何度となく、いわば象眼されていることである。異種混交的な風景の始まりはロンドンを離れた彼らが最初に目にする “a cluster of poor cottages, some with a chair or low board put across the open door to keep the scrambling children from the road” (124) であり、“another cluster of labourer's hut” (125) である。同じ事は後半44、45章でも見られるが、これについては後述する。ネルが眺める “the same sense of solitude in their own breast, and the same indifference from all around” (330) を抱えている人間は郊外にも存在するのである。その点ではここに見られる田園・農村はゴールドスミス (Oliver Goldsmith) の『廃村行』 (*The Deserted Village*) で謡われた悲惨とは無縁ではなく、村の学校のようにクラブ (George Crabbe) の『村』 (*The Village*) を思わせる輝かしい光景ばかりではないのである。

ところで、マーカスは「ネルという神話」 (“*The Myth of Nell*”) と題した『骨董屋』論の中で、ネルという少女の美化と神話化を義妹のメアリー・ハウガス (Mary Hogarth) の死と “the idyllic vision of life” という特定の文学上のコンヴェンションが交差するところに創出されたものと論じている (Marcus, 132-42)。確かにマーカスの指摘はテキストの感傷的な在り方を考える時、示唆を得るかもしれない。しかし、一方ではマーカスの見方は田園というものを作者によってかなり恣意的に作られた事を無視し、時代の環境とは無縁の真空空間として位置付け、その産出理由を作者の個人的な次元へと引き下げてしまう。つまり、ネルが目撃した “a cluster of poor cottages” や失業者の行進 (44、45章) は黙殺されてしまう。そして、クイルプ、ネルを中心とした物語は現実感を欠いたお伽話になる。問題はテキストの田園が一面では美化されているものの、やはり悲惨な現実を示唆する風景が折り込まれているという事実であり、従ってマーカスがテキストの風景をディケンズの個人的な事情からのみ説明しただけでは無理がともなうように思われる。

この論文では、美しい田園の風景と対立するかに見えるこうした労働者の悲惨な描写が一体何を意味するのかを、次のことを手掛かりに考察する。まずテキストに蔓延するマモニズム（拝金主義）について、その対局にあるディケンズが描いた主人と召使という良き人間関係の在り方について。そして、そのような在り方を支える1840年代という時代における労働者の姿勢とそれを支持する一見「反動的」と思われる *Zeitgeist* について。以上の事を考慮しつつ、理想化された風景と涙と労働者という異種混交的な風景の意味とテキストの感傷的な有り様について考察をする事がこの論文の目的である。

2：蔓延するマモニズム

ところで『骨董屋』は、『ハンフリー親方の時計』(*Master Humphrey's Clock*)というディケンズがそれまで試みたことのない週刊誌という媒体を通して、その4分冊目から、中断を挟み40回に涉って連載された物語であり、本来は一回きりの読み切りを想定していたという。期間は1840年の4月から翌年までである。問題は掲載期間の1840年という年代である。一般には「飢餓の40年代」(*Hungry Forties*)といわれ、チャーティズム運動が盛り上がりを見せた、騒然とした時代である。この時代に大きな影響力を振るったカーライルは、「マモニズムという福音」(*Gospel of Mammonism*)と題された『過去と未来』(*Past and Present*) (1846)のなかで、「成功しなかったらどうなるか」という不安感が絶えず人々を呪縛し、過度な拝金主義を育む要因になったと例の激越な調子で告発している。

And now what is it, if you pierce through his Cants, his oft-repeated Hearsays, what he calls his Worships and so forth, — what is it that the modern English soul does, in very truth, dread infinitely, and contemplates with entire despair? What is his Hell, after all these reputable, often-repeated Hearsays. what is it? With hesitation, with astonishment, I pronounce it to me: The terror of “Not succeeding;” of not making money, fame, or some other figure in the world, — chiefly of not

making money! Is not that a somewhat singular Hell? (Carlyle, 277)

これによりもたらされた道徳的な退廃は更に“the black Bottomless of Terror”、“Hell of the English”と形容されている。その程度と度合いの深刻さは、『骨董屋』においても多くの人物が社会的な現実として金の力に大きく支配されているさまからもうかがい知れよう。

好例はトレント老人である。ネルを幸福にするためにギャンブルに手を染めたと、苦しい胸のうちを告白する（83）。そして、ネルが金持ちになり幸福になる事、“but I say again that the time is coming when she shall be rich.”（15）が老人の口癖であり、老人の意識がいかに「成功すること」への意識に深く染められているかわかる。クイルプとのそもそもの出会いがギャンブルにのめり込むあまり、金を借りたのがきっかけである事が、クイルプの金を無心する場面（82）からも充分うかがい知れる。それは同時に、そもそもの発端から金銭的なものを抜きにしてはこのテキストが成立しないことを我々に教えてくれる。それ故、トレント老人は旅先でもギャンブルに没頭する。“desperate passion”（228）に駆られて金をすった老人は、ネルの寝室に忍び込み、なけなしの金すら盗む（234）。挙げ句の果てはアイザック・リスト（Isaac List）やジプシー達に、ジャーリー夫人の金を盗むように唆され、“I'll have it, every penny”（320）と決断し、実行しようとした矢先にネルの機転で再び旅に出ることになる。“a mere child – a poor thoughtless, vacant creature”（222）と形容され、普段の有様とギャンブルに熱中する時の落差は殆ど名状しがたいものがあり、ネルにとっても“another creature in his shape”（234-5）ととうてい同じ人物とは思えない。金への執着心は、ギャンブルに行くのを止めようとした孫娘に次のように語られる。

“We will be happy,” replied the old man hastily. “Let me go, Nell. The means of happiness are on the cards and in the dice. We must rise from little winnings to great great. There's little to be won here; but great will come in time. I shall but win back my own, and it's all for thee, my

darling.”

(227)

老人の浪費癖のため、旅は悲惨で不安定なものになり、ネルは絶えず手持ちの金に注意しなければならなくなる。

「成功」への思いに駆られ、一攫千金を夢見るトレント老人の心性は、程度の差こそあれ、他の人物によっても共有されている。もう一人の孫、フレデリック・トレント (Frederick Trent) も “the hope of gain” (179) を得るためにクイルプと手を組もうとする。また “a gentleman of good family and great expectations” (254) とブラス兄妹に紹介されるディックも、ネルと結婚してトレント老人の財産を相続することを最初は夢見ていた (168-9)。別の箇所では、素封家のおば宛てに “I’ll write another to-morrow morning” (66) と何度も何度も金を無心した手紙を書いた苦勞を打ち明けている。ショーターやコドリもネル達を友人たちの許へ送り返そうと相談するが、これも善意というより、何らかの見返りを期待しての行為とも考えられる (144)。クイルプも同じように他人を犠牲に金を手に入れようと企む。不思議なことにクイルプの生業についてははっきりしないことが多いが、彼がトレント老人から借金の肩代わりに骨董屋を取り上げたことはクイルプの欲を剥出しにした行為である (361)。当然、“unfeeling creditors” と言われるクイルプに対して “mercenary attendants” といわれる Sampson・ブラスも同様だろう (97)。

これらの人物は概ね悲惨な末路を迎える。トレント老人はネルの死後、暫く生き長らえたものの、春のある日、散歩から戻らず路上で息絶えているところを発見される (546)。陰謀が露見したクイルプは、逮捕される前に逃亡を図り、あえなく溺死する (510)。最終章で一番、行数が割かれているのがブラス兄妹だが、彼らとて海外へ流刑になったとか、弁護士名簿から除名されたとか、乞食に身を落したとか (547-8)、喜劇的な印象すら与えるので悲劇的な最期こそ免れているものの、決して芳しいものではない。フレデリック・トレントも無数の傷跡を残した死体が偶然、パリのモルグで発見される (552)。唯一の例外はディック・スイヴェラーである。ブラスの地下室に住んでいた女性のメイドを教育し、伯母からの遺産を相続したディックは (502)、彼女が成人に達して

（“untill she was, at a moderate guess, full nineteen years of age”, 551）婚約し、所帯を構える。ディックとマチヨネス（Marchioness）の二人の関係は『我ら相互の友』（*Our Mutual Friend*）のユージン・レイバーン（Eugen Wrayburn）とリジー・ヘクサム（Lizzie Hexam）の身分違いの結婚というテーマでより大規模な形で反復されることになる。ところで、ディックとマチヨネスを唯一の例外とすると、ここで言及した人物は人間関係を金・経済に従属させ、搾取による支配・被支配の関係を貫こうとしている事で共通しているように思われる。つまり、カーライルの言う cash-nexus、「金による人間関係」の構築であり、ディッケンズが絶えず批判して止まないものである。しかし、一方ではこの cash-nexus とは明らかに異なる、積極的な価値観を有するものとして提示されたものが、テキストに多く見られる主人と召使の関係である。次の章ではそれを検討する。

3：忠実な徒弟たち

断る迄もないがこのテキストには多くの人物が登場する。まとまりのない断片的な構成に加え、夥しい数の登場人物が導入されると、それらをどうまとめてよいのか読者は困惑するだろう。しかし、大道芸人コドリン、ショーター、ジャーリー夫人などの一部の例外を除けば、大半の人物はディッケンズが『ピクウィック・ペーパーズ』（*Pickwick Papers*）でピクウィック（Pickwick）とサム（Sam Weller）の関係以来、一貫して描いてきた主人と良き徒弟という関係に収斂できよう。この場合、徒弟 apprentice と召使 servant は社会学的に言えば、家内工業的における熟練労働者と上・中流階級家庭内における家事労働者という厳密な違いはあるにせよ、ここでは区別せずに扱う予定である。というのも、ディッケンズの場合、召使はフォースター（E. M. Forster）やイシグロ（Kazuo Ishiguro）のように上流階級の召使、butler といった地位には程遠く、前近代的な色合を残しているからである。しかも、キット（Kit）のような、どちらかといえば apprentice 的な存在は、後期以降、butler などに代わられものの、両者の間に断絶を認めるよりも、連続的な繋がりを重視したほうがディッケンズのテキスト全体をある程度、体系的に考慮するには有益なように思われるからで

ある。従って、あまり厳密ではないが、主人・召使の関係をやや緩やかに適用すれば、テキストの夥しい人物関係もある程度すんなりと纏るように思われる。今まで指摘されなかったのが不思議なくらいである。列挙しつつ、検討してみよう。

まずトレント老人とキットの関係である。キットが登場するのは最初の章で、ハンフリー親方の眼を通して、彼のいささか滑稽な姿が提示される (13)。この場面はキットが老人を賭博場へ案内する箇所だろう。彼の具体的な仕事は老人の身の回りの世話をする雑用係り程度と思われるが、ネルと老人に対する忠誠心は物語を通して一貫している。目指す村の教会で遂にネル、老人を捜し当てたとき、“Master!” と叫んで駆け寄って行く場面や (532)、ネルを崇拜するあまり、“as if she was an angel” (518) と言って、バーバラ (Barbara) を再三、やきもきさせる。骨董屋から退却を迫られたネルに自宅で宿泊するように勧めるなど (97)、キットの忠実なさまは際立っている。そんなキットの忠勤ぶりに対して、老人は冷酷な仕打ちをする。クイルプ夫人 (Mrs. Quilp) にネルから祖父の行状を聞きだすよう命じたクイルプ (56) は、老人の “your secret way of life” (83) について情報を得て、これ以上、金の融資はできないと申し渡したのである。老人はキットが秘密を漏らしたと誤解し (84)、“the cause of all his misery” (89) と非難して出入りを禁じてしまう。トレント老人は私生活の秘密が公になる事、とりわけネルに知られる事を恐れてキットの出入りを禁じたわけだが、私生活上の秘密がギャンブルに纏わるものであることは注目しても良い。つまり、トレント老人とキットの紐帯も一見、緊密でありながら、金銭上のトラブルで破綻を来すほど脆弱なものであり、その点ではこれも cash-nexus の一例に漏れない。似たような傾向の (雇用) 関係は他にも見られる。サリーの気紛れで雇われたスイヴェラーは、 Sampson 事務所の “the humble station of a clerk” (254) の地位を任されるが、キットの裁判終決を目前にして、あっさり解雇される (474)。理由は “a means of retrenchment” (465) のため、つまり経費節減というから「金による人間関係」の喜劇的な一例である。クイルプもトム・スコット (Tom Scott) という少年を雇っている。彼らの間には “a strange kind of mutual liking” (47) が存在すると言及されるが、

少年はクイルプからの一方的な暴力に曝されており（45-6, 211）, 「金による人間関係」同様にそれ程、居心地の良いものではない。クイルプの死に際して、少年は形見を持っていき、クイルプへの忠節ぶりが言及されるものの、暴力が介在する点ではこの関係はあくまで陰画的で、積極的な価値を有さない。

数ある関係でも最も重要なものはガーランド氏（Mr. Garland）とキットの関係だろう。ガーランド氏とキットの出会いは一見したところ偶然に見えるが、構成上の観点からすればネルとトレント老人の逃避がすぐ始まる後になる。従って、主人・召使の関係で見る限りこれを契機にトレント老人-キットからガーランド氏-キットへの転換という、積極的な価値の創出へとテキストも関わっていく。出会いは、既にネルのいない骨董屋から戻って来る時、すれ違いにやってくるガーランド氏に馬の世話を申し出たのがきっかけとなっている（114）。ガーランド氏に正式に雇われることになったのは、ネルと老人の消息が遥として知れず、一週間くらい経過してからである（158）。ウィザーデン氏（Mr. Witherden）の家から戻ってくると家にはガーランド氏が来ており、ナッブル夫人（Mrs. Nubble）に息子を奉公人として雇いたいと申し出ているところだった（163）。雇用条件は年額6ポンド、なおその上に住居、食事も保障されているとなれば、それなりの条件だと思われる（164）。フィンチリー（Finchley）にあるエイベル・コテージ（Abel Cottage）に出向いたキットはそこでバーバラ、“a little servant-girl, very tidy, modest, and demure, but very pretty too”（174）に出会い、最後は彼女と結婚することになる。テキストの結末はキットが子供たちに囲まれて“that story of good Miss Nell who died”（553）を語っている様子を示している。そして、かつてそれが存在したと思われる場所へ子供たちを連れていくのだが、すぐに場所が覚束なくなる（554）。こうしてネルの物語はいまや幸福を手にしたキットの記憶とともに語られ、受け継がれる事になるのだが、キットが物語を締括する特権的な地位を与えられたこと自体、ディケンズが物語り後のキットの幸福な生活とそれを保障したガーランド氏との関係に、どれほどの意義を与えようとしていたか、およその見当がつくだろう。この関係がいかに大きな比重を占めるかは、ガーランドのみならず、公証人のウィザーデンまでが、有罪判決の下りたキットの汚名をそそごうと活

躍するさまからも解る。特にディックの下宿近くのパブにサリー・ブラスを呼び付けて、彼らの悪事を暴いて追い詰める箇所は (chp. 66)、丁度『オリヴァー・ツイスト』 (*Oliver Twist*) でブラウンロウ (Brownlow) やガムフィールド (Gamfield) がオリヴァーの生れ故郷の町のホテルにマンクス (Monks) を呼び、彼らの企みの一部始終を問いただす場面との類似を思わせる。つまり、犯罪に巻き込まれ周囲の力によって何とか苦境を脱して、幸福を手にするという構図では、キットの物語はオリヴァーの物語の同種反復なのである。双方とも少年という共通点を持ち社会的な身分では隔たりがあるが、キットの徒弟奉公の方が民衆レベルに近いといえる。つまり “to carry through the various relations of master and servant” (302) を願いとすキットはディケンズにとり理想の徒弟なのである。チェスタトン (G. K. Chesterton) は “the whole substance and spirit of Dickens might be gathered under the general title of *Great Expectations*” (Chesterton, *Chesterton on Dickens*, 51) と指摘し、『骨董屋』ではディックとマチヨネスが真の主人公で有ると述べているが、チェスタトンの見解は『大いなる遺産』 (*Great Expectations*) という作品・作家としてほぼ完成したディケンズから振返った見方であり、『オリヴァー・ツイスト』、『ニコラス・ニッケルビー』 (*Nicholas Nickleby*) と立て続けに長編を執筆し、発展途上にあったディケンズにとって、キットとバーバラの関係も、ディックと同じくらい大いに関心の対象だったと思われる。

そうなるにガーランド、ウィザーデンの二人がどのような人物かわかるだろう。ハウス (Humphrey House) が指摘するようにディケンズのテキストに見られる ‘benevolent characters’ なのである: “The benevolent characters of the Pickwick – Brownlow – Garland – Cheeryble type are never themselves the mouthpieces of destructive Benthamite criticism: their facile charity forbids censoriousness; they are too busy being happy to think” (House, 39)。ガーランドにはブラウンロウ、チェリブル兄弟のようにこれみよがしの気前の良さ、鷹揚さはない。寧ろ、チェリブル兄弟のような気前のよさ、スクルージのような突然の心変わりには心理的な裏付けが希薄なため、かえって現実離れした印象を与える。しかし、たとえ心理的な裏付けは欠けていても、彼らが描かれ、許容

された現実的な裏付けは存在する。それがハウスの言う “a counterblast to an exaggerated, extravagant emphasis on Prudence” (House, 76) である。ピクニック、チェリブル兄弟、ガーランド等が表しているのは ‘Prudence’、文字通り「つつましさ」への反発である。同質と思われるが、それより更に「つつましさ」を強調する言葉に ‘the Victorian Prudery’ がある。これは前者と違って主に性的な事象を忌避する一般的な傾向に用いられ、「淑女・紳士ぶった」という意味だが、ホートン (W. E. Houghton) が “The term has come to be used loosely and broadly to cover all efforts to conceal the facts of life” (Houghton, 356) と指摘しているように適用範囲は多岐にわたる。ホートンは文学における性的なものの仄めかしや検閲等を言及しているが、ハウスの場合、‘Prudery’ ではなく ‘Prudence’ を用いて、それを一般に流布した禁欲的、抑圧的な心理と捉え、その対局に ‘benevolent characters’ と祝祭的なクリスマスを対置している。これらの言葉の意味は厳密に区別するべきだろうが、示唆するところは、共に背後にある抑圧的で、隠蔽的な精神構造という点では共通しているように思われる。ディケンズの場合、“facts of life” は文字通り複数存在するものであり、性的な事象とは限らず、人生の厳しい実情をも指すのではないだろうか。例えば、『オリヴァー・ツイスト』が発表されたとき、当時の首相メルボーン (Melbourne) が示した反応は、ディケンズにとって、まさしく ‘Prudery’ に等しく思われのではないだろうか。メルボーンは “It is all among workhouses and pickpockets and coffin makers I do not like those things; I wish to avoid them. I do not like them in reality and therefore do not like to see them represented” (Marcuss, 61) と嫌悪感を露にしている。『オリヴァー・ツイスト』に描かれた事は、フェイギン (Fagin)、モンクスなど下層階級の地下世界、ナンシー (Nancy) などの ‘prostitute’ やジェイコブ・アイランド (Jacob Island) などの貧民街の存在である。つまり、労働者階級の悲惨な生活の有り様なのである。首相メルボーンの冷淡な反応は当時の上・中流階級では一般的な反応だったかも知れない。ディケンズが糾弾したかったメルボーンの「上品ぶった、気取った態度」、つまり “all efforts to conceal the facts of life” にはこうした支配階級の労働者の現状への無関心・無知がついてまわったと思われる。それ故、

ガーランド等の 'benevolent characters' が存在する背後にはこうした文脈は無視できないだろう。実際、指摘した通り、テキストのあちこちに労働者が見られる。次はテキストの労働者とチャーティズム運動について述べる。

4：排除されたもの、又は「他者」としての労働者

『骨董屋』では労働者の姿をよく見かける。ネルと老人がロンドンの街中を通過する際に出くわすのは“a stragglng neighbourhood, where the mean houses parcelled off in rooms, and windows patched rags and papers, told of the populous poverty that sheltered there.” (121) といったメルボーンなら目にしたくもない光景である。“Damp rotten houses, many to let, many yet building, many half built and mouldering away” (121) が両側に続く街路を抜け、聖ポールを遠方に見る郊外で二人が目にしたのも、“a cluster of poor cottages” (124), “another cluster of labourers' huts” (125) が点在する光景である。最も強烈なのはジャーリー夫人の後を慌てて旅立った二人が、閑かな船旅を一晩続けて辿り着いた箇所である。遠方に“the clustered roofs, and piles of buildings trembling with the working of engines, and dimly resounding with their shrieks and throbbings” (329) を望む光景はやがて恐ろしい相貌を表す。

問題はそこに住む人々の実態である。ネル達が出会った群衆は“intent upon their own affairs; and undisturbed in their business speculations, by the roar of carts and waggons” (329) と一様に思い詰めた表情で、同じ孤独感を胸に秘めているように思われる (330)。“Charity. A morsel of bread.” (341) を求めるネルに、毛布でくるまれた死んだ子供の遺体を示す者 (341)。二人が案内された工場の内部は“a number of men laboured like giants” (333) と多数の労働者が働いている。その中の溶鉱炉、“one furnance burnt by night and day”

(333) の前で、日夜、火を眺めて育ったという青年は両親が既に死んでしまった事、工場の中で育てられた事などを語り、自分の幼年時代がどのようなものだったか見当がつくだろうかと、ネルに問う (335)。テキストの編者、ブレナン (Elizabeth. M. Brennan) によれば“What kind of child I was” という表現は 'cripple' を暗示しており、その裏付けとしてエンゲルス (Friedrich Engels)

の *The Condition of the Working Class in England* (1845) の中で見られるという (Brennan, 605)。このような光景はまた、カーライルが *Chartism* (1839) の中で既に指摘するところである。終息にむかってもその “living essence” は押さえられないと、“Chartism means the bitter discontent grown fierce and mad, the wrong condition therefore or the wrong disposition, of the Working Class of England”. (Carlyle, *Chartism*, 151) と燻った不満がうごめいていることを示唆する。実際、次にネル等が出会うのは一個人の労働者ではなく、それこそチャーティスト運動を彷彿とさせる怒れる労働者の群れである：“Men, women, children, wan in their looks and ragged in attire, tended the engines, . . . or scowled half-naked from the doorless houses.” (339) そして、この次に目撃したのは失業者の群れである。

But night-time in this dreadful spot! — night, when the smoke was changed to fire; when every chimney spirted up its flame; and places, that had been dark vaults all day, now shone red-hot, with figures moving to and fro within their blazing jaws, and calling to one another with hoarse cries — night, when bands of unemployed labourers paraded



図 1

in the roads, or clustered by torchlight round their leaders, who told them in stern language of their wrongs, and urged them on to frightful cries and threats; when maddened men, armed with sword firebrand, spurning the tears and prayers of women who would restrain them, rushed forth on errands of terror and destruction, to work no ruin half so surely as their own — . . . who shall tell the terrors of the night to that young wandering child! (339-40)

ディケンズはこの箇所をH. K. ブラウン(Hablot. K. Browne)の挿絵(図①)に合わせ、本来は削除してもよい箇所なのに更に加筆を施したという(Brennan, 605)。これが40年代に最高の盛り上がりを見せたチャーティズム運動を思わせることは、既に指摘した。実際この光景はディケンズの見聞に基づくもので、バーミンガム(Birmingham)からヴォルバーハンプトン(Wolverhampton)までの旅行がそれにあたるという。恐らく『ハンフリー親方』が販売される40年4月26日にバーミンガムを訪れているので、その時の事だと思われる(Lucas, 90)。ところでこれが契機となって革命が起こるのではないかという危惧はかなり根強かったらしい事は、村の学校で半日で休校にしたことに、親達が“it was a slight to the throne and an affront to church and state, and savoured of revolutionary principles, to grant a half-holiday upon any lighter occasion than the birth-day of the Monarch”(195)と騒ぎ立てる箇所からも伺うことができる。これは当時の社会、政治体制、とりわけ50年代以前のそれが、革命という恐怖に絶えず曝されていたことを示している(Houghton, 54-8)。

こうした労働者、貧民たちが一様に孤立した存在と描かれていることは注目されて良いだろう。“a large and lofty building”の中で“the beating of hammers and roars of furnaces”(333)の音を聞きながら、黙々と仕事に励む匿名の労働者たち。松明を掲げて行進する“bands of unemployed labourers”(340)。また、雨宿りするネルと老人の前を通り過ぎる労働者達は一様に思い詰めた、各々分断された姿で描かれている。

THE throng of people hurried by, in two opposite streams, with no symptom of cessation or exhaustion; intent upon their own affairs; and undisturbed in their business speculations, by the roar of carts and waggons laden with clashing wares, the slipping of horses' feet upon the wet and greasy pavement, the rattling of the rain on windows and umbrella-tops, the jostling of the more impatient passengers, and all the noise and tumult of a crowded street in the high tide of its occupation: . . . Some frowned, some smiled, some muttered to themselves; some made slight gestures, . . . ; some wore the cunning look of bargaining and plotting, some were anxious and eager, some slow and dull; in some countenances were written gain; in others loss. (329-30)

ところで、工場労働者のこうした孤独で、分断された様子は44、45章で集中的に描かれているために、前後の文脈を欠いた断片的なものに見做されやすい。工業化による非人間性の告発をディケンズが思いついたように挿入したというわけである。しかし、これは何もディケンズの気紛れでもないことは、既に指摘した主人と召使という関係に置いて見ればその真意が解るのではないだろうか。つまり、集団として孤立した工場労働者の実態は、ガーランド・キットなどディケンズが理想とした主人・召使の対比において見るべきであろう。ここに描かれた労働者たちは工業化によって近代的な雇用関係に組み込まれることで、これまで主人・召使という温情的な関係によってなんとか維持してきた経済的基盤が崩しにされ、分断された人々なのである。ネルが施し物を求めた“a gaunt miserable man” (341) が“I and five hundred other men were thrown out of work three months ago” (341) と死んだ子供を指差して叫んでいたのを思い出せばいいだろう。そこで社会の底辺部へ追いやられた人々が望むことは、更に機械化・合理化を推し進め、労働条件の一層の「改善」を図ろうというよりは、寧ろ保守的な人間関係の維持という後退した側面である。1842年のブラックバーン（Blackburn）の工場ストライキでは導入された“the first spinning factory and power-loom”を受け入れ、それに順応して行くよりも、

“They might seek to forget about it, dreaming of a return to peasant proprietorship” (E. J. Hobsbawm, 123) であることが報告されている。チャーティスト (Chartist) のファーガズ・オコナー (Fergus O'Conner) もこれを念頭に置いていたことは、この運動の保守的な一面を物語っている。構造的な変化に戸惑い、時代にとり残された人々が、守勢にまわる事は十分に考えられることである。ガーランドとキットの温情主義的な関係は、既に時代遅れになりつつあったかもしれないが、疎外された人々にとって、“peasant proprietorship” を夢見る人々にとって、受け入れる余地は充分あったと思われる。「金による人間関係」とはまさしく対極にあるからである。cash-nexusによる人間関係の殺伐さと非人間性が集約されたのが、ここに描かれた工場労働者の有り様であり、急激な変化への反発として描かれたのが甘いノスタルジーが漂う『骨董屋』の田園風景なのである。結論ではテキストの風景を支える感情の枠組みについて言及する予定であるが、その前に無秩序、破壊的な変化の所産としてのクイルプについて簡単に述べたいと思う。

5：クイルプ、又は「異形」の「他者」

工業化の非人間的な、破壊的な衝動が一番よく象徴されているのが、他ならぬクイルプである。クイルプについてはその人間離れした、グロテスクな容姿からシェイクスピアの『リチャード三世』 (*Richard the Third*) の影響を受けて創造されたとか指摘されている²。確かに “the dwarf” (27) と形容され、“the grotesque expression”, “the ghastly smile” (27), “his monstrous head and little body” (30) という具合に非現実的な要素を強調する形容詞が畳み掛けられると、その想像を絶する行動力、エネルギーと相俟って、この世ならぬ彼岸の生き物という印象を受ける。勿論、舞台芸術にも関心を示したディケンズがシェイクスピアから受けた影響を全て否定するつもりはないが、一方ではクイルプの背後には厳然とした現実というものが存在する。つまり、彼がテムズ河沿いに事務所を構え、何らかの仕事に携わっていたという紛れもない事実は、無視できるものではないだろう。クイルプの事務所は “this counting-house, with nothing in it but an old ricketty desk” (48) と内部は詳細に知らさ

れている。そこで金融業的な仕事に着いていたことは、たとえそれが稼働しているきらいはないにせよ、容易に推察できるだろう。ルーカスはクイルプがあくまで“vast and troubling social actualities”と結びついた“emblem of business affairs”（Lucas, 88）である事を指摘しているが、蓋し正解だろう。実際、クイルプの「仕事」がかなり具体的に示唆されている。

Mr. Quilp could scarcely be said to be of any particular trade or calling, though his pursuits were diversified and his occupations numerous. He collected the rents of whole colonies of filthy streets and alleys by the waterside, advanced money to the seamen and petty officers of merchant vessels, had a share in the ventures of divers mates of East Indiamen, smoked his smuggled cigars under the very nose of the Custom House, and made appointments on Change with men in glazed hats and round jackets pretty well every day. (34)

引用文からもクイルプの仕事が東インド会社、Custom House 等の当時の金融市場と何らかの関わりを持っていたことが推測できよう。しかも、クイルプの事務所にある“an ancient almanack”（48）は航海暦とも考えられる。更に重要なのはクイルプとテムズ河の密接な結びつきである。引用文の続きではサリー・サイド（“Surry Side”）に「クイルプ波止場」（“Quilp Wharf”）を持ち、そこで“a ship-breaker”、つまり船舶解体業を営んでいると記されている。船舶業に従事している者は、メイヒュー（Henry Mayhew）がまた詳細な記録を残しているが、ディケンズも同様に興味を持っていたらしい。『我ら相互の友』のヘクサム（Gaffer Hexam）がすぐ思い浮かぶが、以前から興味があったらしく『オリヴァー・ツイスト』でも“the inhabitants of these miserable cottages pursued some avocation on the river”（*Oliver Twist*, 236）と言及されている。要するにクイルプは、ギャファー・ヘクサムに近い仕事をも生業としていたテムズ河周辺の港湾労働者かつ金融業者とも考えられる。又、わざわざ“smuggled cigars”と断ってあるから密輸らしき交易とも関わっていたのかも

知れない。いずれにせよクイルプはルーカスが指摘する通り、紛れもなく社会的存在なのである。

それでは、なぜクイルプはあのような現実離れした、容貌怪異な人物として描かれたのだろうか。容姿だけを見るならばクイルプはシェイクスピアかグリム童話の世界にいたほうがしっくりするだろう。それは、クイルプが当時の読者にとって徹頭徹尾、余所者、「他者」であるからに他ならない。例えば、ネルの熱烈な賛美者でもあった詩人、トーマス・フッド(Thomas Hood)が匿名で『アシーニウム紙』(*Athenaeum*)に寄せた書評では“The character of the wharfinger and dwarfinger, Daniel Quilp, is strikingly brought out”とクイルプの強烈な個性について述べているが、それに続くフッドの言説にはクイルプに対する軽い戸惑いが見られる。

In fact, he lays himself out for, and is, a ‘Little Enormity.’ Whether such beings exist in real life, may appear, at first sight, somewhat questionable; but in fairness, before deciding in the negative, one ought to go and view the ‘wilderness’ assigned as his haunt; and then to ask whether there may not be for such scenery fit actors and appropriate dramas? It has been said that one-half of the world does not know how the other half lives; . . . : it is quite as certain that one-half of London is not aware of even the topographical existence of the other; . . . there may be such persons as Quilp about the purlieus and back slums of human nature.

(*Critical Heritage*, 98)

フッドの戸惑いは何かを思い出させないだろうか。これは『オリヴァー・ツイスト』を読んだ首相メルボーンの後感と似た何かを思い出させる。フッド自信はメルボーン程の嫌悪感は共有していなくとも、少なくともフッドが語り掛けている読者はメルボーン程ではないにせよ、偏見と無知とは無縁ではなさそうである。つまり、当時の読者にとって、クイルプのような下層の労働者は日常では必ずしも見慣れた存在ではなかったのである。その点ではこの書評は中

産階級の読者がディケンズの描く労働者をどう見ていたかという、手がかりを与えてくれる。要する、クイルプがその外面描写に誇張を免れなかったとすれば、下層労働者の実態と産業化が彼らに及ぼした影響を示すため、読者の関心を引かなければならなかったためと思われる。その意味ではクイルプは「異形」の「他者」と言えるだろう。

6：ノスタルジーの風景

今まで論じてきたことをまとめると次のようになる。まずテキストの登場人物に共通する金銭欲を、トレント老人を中心に論じた。トレント老人に見られる金銭欲は「金による人間関係」の典型と思われるが、その呪縛を逃れた例としてディックとキットを指摘したが、本論ではチェスタトンの批評以来、重要視されているディックとマチョネスよりもキットに重点を置いた。確かにバーバラの存在はマチョネスに比べると希薄であるが、ディックがあくまで後期ディケンズという完成された立場からの見方であるなら、発展途上のディケンズ（少なくとも『骨董屋』を執筆している時点では）にとりキットのほうが比重が重いように思われるからである。しかも、テキストの労働者の多くはガーランド・キットという温情的な、paternalisticな関係から疎外された者たちであり、それ故に彼らにとってこのような関係は必ずしも理想的ではなかったにせよ、ホブズボームの言葉を借りれば“a return to peasant proprietorship”を望む声は強かったと思われる。いわゆる“Condition of England Question”といわれるこの時代に関しては、労働者の生活条件の改善を巡る動きも見られる反面、過去を美化しなつかしむ風潮があった事も忘れてはならない。ガーランド・キットの関係が描かれるのもこうした背景があつてこそである。バリー・サップルはディズレイリ（Disraeli）、サウジー（Robert Southey）等の保守的な文人を例にとり、“Those who looked enviously back to a preferred past, . . . also argued that the peasant or artisan of pre-industrial days had been much better-off than the contemporary poor”（Supple, 64）と説明しているが、“the peasants or artisan of pre-industrial days”にキットのような徒弟というか、彼とガーランドの温情的な関係が含まれることは言わずもがなであろう。このよ

うな事実があってこそ、感傷的な、保守的な心情を許容する余地があったといえる。つまり、それが目に見える形で40年代に流行を見たのが、ケネス・クラーク (Kenneth Clark) の言葉を借りれば「ゴシックの復興」(the Gothic Revival) なのである。このテキストではゴシック建築・教会が心象風景として大きな役割を果たしている。ここではそれについて論考する。

ネルとゴシック建築との親和関係はテキストの顕著な特徴となっており、後半部分で目立つ。とりわけ44、45章で失業者の悲惨な状況が描かれているために、その対照は著しい。次の46章で校長先生のマートン氏に出会ってから、赴任先の教会に住むことになる。二人の前にでてきた村の教会は次のように描かれている。

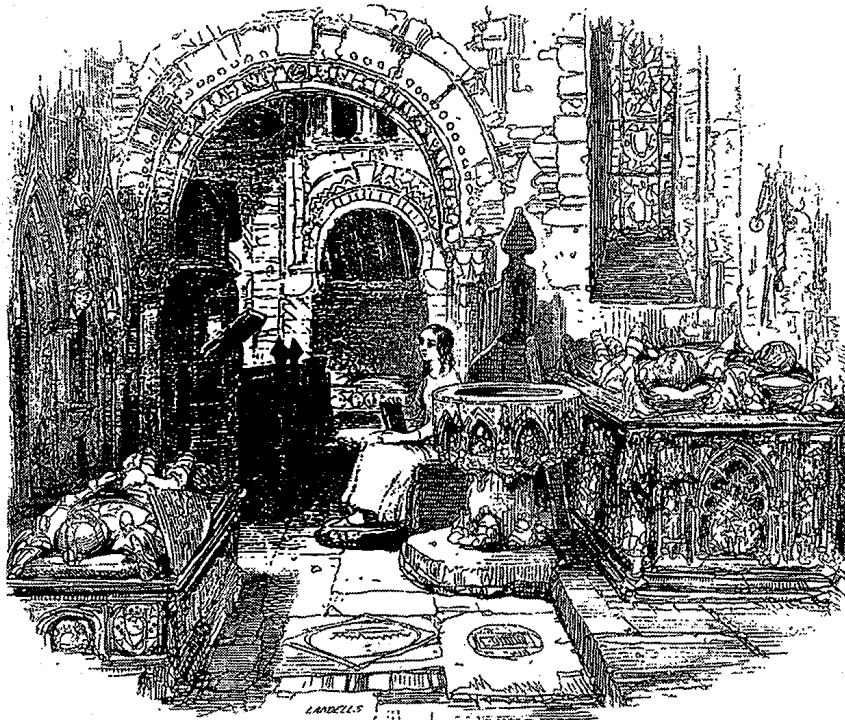
It was a very aged, ghostly place: the church had been built many hundreds of years ago, and had once had a convent or monastery attached; for arches in ruins, remains of oriel windows, and fragments of blackened walls, were yet standing; while other portions of the old building, . . . were mingled with the church-yard earth and overgrown with grass, . . . (352)

ゴシック教会の外観は既に挿絵画家ジョージ・キャタモール (George Cattermole) によって視覚化されている。『骨董屋』の挿絵画家のもう一人は、かの有名なハブロット・ブラウン (Hablot Browne) だが、キャタモールが共同参画者としてディケンズに協力を求められた背景には、彼の主たる関心が建築にあり、その描くゴシック教会がディケンズをいたく感心させたからである (Harvey, 119)。実際、オックスフォード挿絵版全集 (The Oxford Illustrated Dickens) では 'A very Aged Ghostly Place' と題された挿絵 (図②) の他にゴシック教会の内部やそれを周辺人物や風景の一齣として描いた挿絵は他にも五点程あるという^{注3}。例えば、その中の教会の内部に案内されて "It's a beautiful place!" (388) とネルが感嘆する場面や、そこで安らぐネルの姿は (図③) 等は彼女の静的なイメージをかなり決定的なものにしている。ゴシック教



図②

会・建築にディケンズが少なくとも視覚的な意味において関心を持っていた事は、ナッブル夫人が通う“a particular little Bethel” (304) と比較すれば明らかになる。代りにネルを探す旅に出てもらうために、母親を見つけた教会は、恐らくメソヂスト教会だろう。母親を見付け、連れ出そうとすると牧師が



図③

“Stay, Satan, stay!” (311) と叫ぶ様から、ディケンズの嫌悪感を見るのは容易である。二つの教会の対照的な落差は余り指摘されないが、注意しても良いだろう。

更にゴシック建築への偏愛は中世への嗜好となる。“the Bachelor”の趣味がその好例だろう。過去への郷愁は歴史への眼差しへと変わる。偶然にもガーランドの兄弟であるこの人物は教会内部にある墓から、その様々な歴史・逸話を探ることを楽しみにしているが、中世趣味 (Medievalism) への傾斜は明らかである。地下室を案内しながら、それに纏わる故事来歴を次のように語っている。

Thus, in the case of an ancient coffin of rough stone, supposed for many generations to contain the bones of a certain baron, who, after ravaging, with cut and thrust, and plunder, in foreign lands, came back with a penitent and sorrowing heart to die at home, . . . In like manner, when the aforesaid antiquaries did argue and contend that a certain secret vault was not the tomb of a grey-haired lady who had been hanged and drawn and quartered by glorious Queen Bess for succouring a wretched priest who fainted of thirst and hunger at the door, . . . It was from the lips of such a tutor, that the child learnt her easy task. . . . It was another world, where sin and sorrow never came; a tranquil place of rest, where nothing evil entered.

(402-3)

安らぎと落ち着きをもたらしているのは博物館を思わせる重厚な歴史的な営みである。ゴシック建築が人間関係の安定感と均衡の拠り所を思わせる事は、例えばフィンチリーにあるエイベル・コテージ (Abel Cottage) の外見からも伺える。“a beautiful little cottage with a thatched roof and little spires at the gable-ends, and pieces of stained glass in some of the windows” (173) と描かれる家には、一般の家屋では余り見られない“spires”, “stained glass”がわざわざ言及され、教会の佇まいを連想させる。中世趣味の幽かな残響がある。

ところで、この40年代がチャーティズム運動に代表される労働運動が流行を見た年代であることは既に述べたとおりである。興味深いことに、急進的な運動に対して復古的な動きがこの時代を陰影あるものになっている。それが何度も言及している中世趣味の流行だが、スコットを嚆矢とする中世への憧れはロマン主義的な気運を反映した現状への不満表明、つまり“the wish to discover there a society more stable and equitable, an intellectual temper more unified and free of doubt, than the Victorian age was capable of.” (Altick, 105) である。宗教的にはマニング卿 (Cardinal Manning) のカトリックへの改宗やオックスフォード運動 (Oxford Movement) であり、文学的にはサウジーの『サー・トーマス・ムーア』 (*Sir Thomas Moore*, 1829) や『骨董屋』の五年前に出たピュージン (August Welby Pugin) の『対照』 (*Contrasts*, 1836) が挙げられる。とりわけ後者は1440年代と1840年代のあるカトリックの町の様子を比較して中世の社会に同時代では失われた、宗教と世俗の緊密な連帯関係に基づく秩序と個の救済を評価しているという。そのため騒々しい時代に不安を覚える人々にとって、こうした中世的なゴシック建築に象徴されるものを受容する余地は、カトリックにもプロテスタントにも、それぞれ同様に見られたという (Nancy Hill, 99)。そこにノスタルジーが生じる余地が生まれる。その意味ではテキストの表題が『骨董屋』となっているのは、チェスタトンが指摘する通り “something in the nature of a key to the whole Dickens romance” (G. K. Chesterton, *Charles Dickens*, 87) であり、示唆に富む。但し、ディケンズの場合、中世趣味はあくまで表面的なものであり、このテキストでも個人の感傷を吐露するのに利用した経緯が強いように思われる。最終章では、ネルの死とディケンズ個人の関わりについて述べ、結論とする。

7：涙の共同体

ネルの死に大きな影響を与えたのは義妹メアリー・ハウガースの死である。メアリー・ハウガースは新婚のディケンズ夫妻の家に住み込み、死ぬ37年まで暮らしたという (Monod, 182-4)。メアリー・ハウガースとネルをある程度、同一視する批評はこうした伝記的事実を間違いなく踏襲している。これらの関

係は数多ある研究書に譲るとして、ここではディケンズが義妹の死に際して流した感傷的な涙が、ネルという人物を介して同様の感傷的な涙を呼んだ事を確認すればいいだろう。それは同時代の批評、フッドの書評、マクリディー (William C. Macready) の日記を見れば一目瞭然である (*Critical Heritage*, 94-99)。チャーティズム運動を指導したダニエル・オコナー (Daniel O'Connor) も感涙の余り窓から本を放り出してしまったという (Ford, 56)。これは読者ばかりではない。登場人物も同じである。よく見ると実に多くの人物がネルのために、彼女の死が避けられぬ事を察しているかのように彼女のために涙を流す。あれだけ孫の苦難に鈍感であったトレント老人ですら “the weakness and devotion of the child” (411) を忘れず、ネルを埋葬する人々の間からは嗚咽の音が漏れてくる (542)。クイチッチ (John Kucich) はネルの死の儀式性を指摘しているが (Kucich, 219)、テキストが昇天するネルの姿 (図④) で終わっているのはそれを物語っている。ヒロインの死を以て作者ディケンズ、登場人物、読者の三者は共通の気分・感情を得たのである。ディケンズは私生活で遭遇した悲劇をネルという少女を創ることで、何とか回避する。そして、ネルの死は読者の琴線に触れ「神話」となる。ディケンズの個人的な体験は読者の共通体験にもなったが、それはネルという物語上のキャラクターを通してであり、そ



図④

れが可能になったのも読者の心情がディケンズのそれとさほど隔たっていなかったからだろう。というのも、そうした心情が一方では、ガーランド・キッドという良き主人と召使という既に時代遅れになりつつあった関係をゴシックの建築を背景に描くことを可能にしたからである。但し、その間隙を縫うようにしてディケンズが、労働者の惨状を「点描」せざる得なかったのは、涙ですべてを曇らせ、ノスタルジックで保守的な心情に浸るには、作者の内面は幾分、複雑だったのかも知れない。そのようなディケンズの心情が、古風なゴシック建築で彩られた、奇妙に感傷的だが、一方では現実を見据えた異種混交的な風景を拵え上げたのである。

注：

1. ディケンズがネルの死に際しては多くの読者から、助命嘆願の手紙をもらったという事実はどこの研究書を見ても言及されている。モノ（Monod）は出版の経緯を考えてもネルの死は当初から作者の念頭にあったもので、必ずしも即興的でないことを論証している。モノは更にネルの音が 'knell' を連想させると指摘している（Monod, 182）。
2. クイルプとリチャード三世の関係を述べた代表的な論考は次を参照。Alfred Harbage "Shakespeare and the Early Dickens," G. B. Evans ed. *Shakespeare: Aspects of Influence* (Harvard U.P. 1976)
3. 他の挿絵の頁数は以下の通り。389、531、538。挿絵の名称はオックスフォード挿絵版の全集には便宜的な名前が記されているが、ワールズ・クラシック、ペンギンの両方の版には記されていない。従って、ここでは挿絵版全集の名称よりも、ワールズ・クラシック版の頁数を記した。

引用文献

- Altick, Richard. *Victorian People and Ideas* London: J. M. Dent & Sun Ltd, 1974.
- Brennan, Elizabeth M. An introduction and explanatory notes to Dickens's *The Old Curiosity Shop*. Oxford: Oxford U. P., 1998.
- Carlyle, Thomas. *Chartism*. In Shelston, Alan, ed. *Selected Writings*. Harmondsworth: Penguin Books, 1986. 149-231.
- Carlyle, Thomas. *Past and Present*. In Shelston, Alan, ed. *Selected Writings*. Harmondsworth: Penguin Books, 1986. 257-281.
- Chesterton, G. K. *Charles Dickens*. London: Methuen & Co. Ltd, 1905.

- Chesterton, G. K. *Chesterton on Dickens*. London : Dent & Son, 1992.
- Dickens, Charles. *Oliver Twist*. Oxford : Oxford U. P, 1982.
- Dickens, Charles. *The Old Curiosity Shop*. Oxford : Oxford U. P, 1998.
- Ford, George. *Dickens and his Readers*. New Jersey: Princeton University Press, 1955.
- Harvey, John. *Victorian Novelists and their Illustrators*. London : Siewick & Jackson, 1970.
- Hill, Nancy K. *A Reformer's Art : Dickens' Picturesque and Grotesque Imagery*. Athen : Ohio University Press, 1981.
- Hobsbawm, E. J. *Industry and Empire*. Harmondsworth : Penguin Books, 1990.
- Hood, Thomas. His unsigned reveiw of *Master Humphrey's Clock* in *Athenaeum*. In Collins, Philip, ed. *Dickens: The Critical Heritage*. London : Routledge & Keagan Paul, 1971. 94 - 98.
- Houghton, W. E. *The Victorian Frame of Mind, 1830 - 1870*. New Haven : Yale University Press, 1957.
- House, Humphrey. *The Dickens World*. London : Oxford University Press, 1941.
- Huxsley, Aldous. *Vulgarity in Literature*. London : Chatto & Windus, 1930.
- Kucich, John. *Repression in Victorian Fiction*. Berkeley : University of California Press, 1987.
- Lucas, John. *The Melancholy Man : A Study of Dickens's Novels*. London : Harvester Press, 1970.
- Marcus, Steven. *Dickens : From 'Pickwick' to 'Dombey'*. London : Chatto & Windus, 1965.
- Monod, Sylvere. *Dickens the Novelist*. Norman : U. of Oklahoma Press, 1968.
- Supple, Barry. "Material develoment : the condition of England 1830 - 1860", In Lerner, Laurence. ed. *The Victorians*. London : Methuen, 1978. 49 - 69.